The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜文献紹介＞ ヴォルフガング・エーリッヒ・ミュラー著 『ハンス・ヨナス―責任の哲学者』 Müller, Wolfgang Erich : Hans Jonas; Philosoph der Verantwortung, WBG, Darmstadt, 2008
Author(s)	戸谷, 洋志
Citation	メタフュシカ. 2013, 44, p. 133-139
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26549
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《文献紹介》

ヴォルフガング・エーリッヒ・ミュラー著

『ハンス・ヨナス——責任の哲学者』

Müller, Wolfgang Erich: *Hans Jonas; Philosoph der Verantwortung*, WBG, Darmstadt, 2008

戸谷洋志

本稿はヴォルフガング・エーリッヒ・ミュラーによる 2008 年の著作、『ハンス・ヨナス——責任の哲学者』を紹介する。256 ページからなる本書は、ヨナスの各年代の思想を解説し、それらに一貫するテーマを解明しようとする、いわゆる典型的な「解説書」である。その筆致は平易かつ簡潔で、読み手を選ばない。管見する限り、本書はヨナスへの最良の入門書である。そうであると同時に、本書はヨナス研究における重要文献として評価されるべきである、と本稿は考える。その理由は、ヨナスを解説することにつきまとう、独特の困難さに由来する。

本書の内容に取りかかる前に、まず著者について触れておきたい。著者ミュラーは、1947 年に生まれ、2000 年にハンブルグ大学プロテスタント神学部の教授に就任した。神学および哲学を研究し、1988 年にヨナス研究の単著[1]を刊行して以降、継続的に優れた業績を残している。本稿がミュラーに注目する理由の一つは、彼が討議倫理の論客ではない、ということである。80 年代から現在に至るまで、ドイツにおけるヨナス研究は討議倫理に属する研究者たちによって主導されてきた。ヨナスに対して「最も根底的な批判」[2]を与えたのは討議倫理の旗手であるカール・オットー・アーペルであり、さらにその弟子筋にあたるディートリッヒ・ベーラーは、ベルリンに本拠をもつハンス・ヨナス・センターの現所長である。その一方で、討議倫理に与さずにミュラーほど長期的にヨナスを研究している哲学者は多くない。そうした意味でミュラーは、ヨナスと討議倫理の関係について中立的な判定が行える立場にあり、実際本書でもそうしたヨナスの研究史を俯瞰的に叙述している。その意味でだけでも、本書は注目に値するのである[3]。

---

1 Müller, Wolfgang Erich, *Der Begriff der Verantwortung bei Hans Jonas*, Frankfurt a. M., 1988

2 品川哲彦『正義と境を接するもの——責任という原理とケアの倫理』、ナカニシヤ出版、2007 年、p.102。

3 以下、本稿では『ハンス・ヨナス——責任の哲学者』からの引用に限り頁数のみを記す。

1．本書の主題――ヨナスを「追跡」する

ハンス・ヨナスを解説することは困難である、と上述した。それは、ヨナスの代名詞的な著作である『責任という原理』の圧倒的な知名度と影響力に由来する。著者ミュラーは次のように指摘する。

> 今日、ハンス・ヨナスについて語る人は、さしあたりヨナスの後期の著作を念頭に置くことだろう。その著作とは、ヨナスにとって 76 歳の年である 1979 年に、長年の英語での執筆活動を経て、ドイツで公刊された『責任という原理』である。（S.9.）

『責任という原理』はドイツ国内で 20 万部を売り上げ、哲学書としては異例のベストセラーになった。ヨナスはその中で、現代の科学技術のもつ潜在的な危険性を指摘しながら、人類の存続に対する責任を現在の世代が負うべきである、と主張し、新しい倫理学の必要性を訴える。それによって「ヨナスは環境保護という思想を哲学的な議論の中に導入した」（ibid.）。他方でこの書物は、哲学研究の世界に留まらず、国際社会全体に対して強い影響を与えた。「これ以降、自然と責任の関係は包括的に議論される。1992 年のリオデジャネイロにおける環境と開発に関する国連会議は、ヨナスの衝撃なしには考えられない」（ibid.）。こうした背景を省みれば、ヨナス＝『責任という原理』という固定観念は、ある意味では不可避なものである。

他方で、この固定観念はヨナスの他の著作への関心を制約するものでもある、とミュラーは指摘する。「こうした受容のなかで、ヨナスに固有の責任概念を構成しているような存在論との連関が、通常は注目されないままになっている。このことは、責任概念を打ち出していくために、ヨナスが前もって著していた書物の意義が、反省されないままになっている、ということと結びつく」（ibid.）。確かに『責任という原理』は圧倒的な知名度と影響力をもっている。しかし、その思想の理論的な基礎をなしているヨナスの存在論は、『責任という原理』以前に執筆された著作群によって検討されるべきである。それがミュラーの見解であり、本書における基本的な立場である。この立場からヨナスの思想を捉えなおすために、ミュラーは次のような課題を本書の主題として提示する。

> ヨナスの思想を紹介するために、本書ではヨナスによるドイツ語の著作の試みとその意図とが提示され、相互に関係づけられることになる。それによって、グノーシス研究から責任倫理学へと至るヨナスの思考の道程が明らかになるだろう。この二つの極を媒介する過程で、ほとんど受容されていないヨナスの著作『生命の哲学』が、宗教哲学と同様に、重要な機能を果たすことになるだろう。そのようにして、地上における現実の人間の生命のために重大な衝撃を与えたこの哲学者の思想は、追跡されるべきである。（S.7.）

このようにミュラーは、グノーシス研究、宗教哲学、哲学的生命論、責任倫理学という幅広いヨナスのテーマを論じながら、ヨナスの思想を「追跡」する。ただし、それは年代別のヨナスの

思想をカタログ的に並列させることを目指すものではない。書名『ハンス・ヨナス——責任の哲学者——』が示唆するように、ミュラーはあくまでも責任倫理学をヨナスの最も重要な思想として理解している。本書で論じられるテーマ群は、最終的には責任倫理学への発展過程、あるいはそこからの派生形態として、説明される。この点が本書の視座として前提され、全体に抑制を効かせつつ、一貫性を与えている。ただし、この前提が読者のヨナス解釈をあらかじめ制約するものであることは、留意されなければならない。

２．本書の構成

本書は七つの章からなる。以下に目次を記す。

Ⅰ　ハンス・ヨナスの伝記
Ⅱ　グノーシス研究
Ⅲ　有機体と自由
Ⅳ　責任倫理学
Ⅴ　アウシュヴィッツ以降に神を考えることの可能性について——宗教哲学に関する考察
Ⅵ　哲学的探求と形而上学的推測
Ⅶ　結論

それぞれの章の順序は、ヨナスの各著作を時系列に従って追うものになっている。「Ⅱ　グノーシス研究」では、30 年代から 50 年代にかけて、第二次世界大戦を跨いでヨナスが執筆した「グノーシスと古代の精神」[4] をもとに、ヨナスのグノーシス研究が手堅く要約されている。「Ⅲ　有機体と自由」では、1973 年に公刊された『生命の哲学』をもとに、哲学的生命論の多様な論点が解説されている。「Ⅳ　責任倫理学」では 1979 年公刊の『責任という原理』が、「Ⅴ　アウシュヴィッツ以降に神を考えることの可能性について——宗教哲学に対する検討」では 1984 年の講演論文「アウシュヴィッツ以降の神の概念」が、「Ⅵ　哲学的探求と形而上学的推測」では 1992 年の同名の著作『哲学的探求と形而上学的推測』が、主たる文献として検討されている。

また、各章ごとに、ヨナスの思想に対する他の哲学者からの批判がまとめられている。特に、「Ⅳ　責任倫理学」における討議倫理からの批判の紹介は注目に値する。ミュラーに拠れば、「多くの討議倫理の支持者がヨナスと対決した。そして、ヨナスによる倫理学の存在論的な基礎付けを批判しながらも、ヨナスの企図に哲学的に許容できるなんらかの基盤を与えるために、責任という概念を超越論的語用論的に熟考しようとした」(S.145.)。ここでは、アーペルによるヨナスへの批判と、ヴォルフガング・クールマン、およびベーラーによるヨナスと討議倫理の理論的対立の統合の試みとが紹介されている。この三者は先行研究のなかでも特に影響力が強く、読者はこ

[4] この書物は、第一部、第二部、第三部からなり、それぞれが独立した書物である。第一部が 1934 年に、第二部が 1954 年に、第三部は『グノーシス——異質なる神の御告げ』としてヨナスの死後 1999 年にクリスチャン・ヴィーゼの編集によって公刊されている。

れによってドイツにおける近年の研究のメインストリームを抑えることができる。ただし、あえて惜しい点を挙げるとすれば、ミュラーは「倫理の展望には新しい次元が付加されなければならない」[5]と題されたヨナスのインタビューに是非言及するべきであった。というのも、それは討議倫理に対するヨナスの応答が記されている唯一の文献であるからだ。これに言及することで、ヨナスと討議倫理の両者の立場はより鮮明になっただろうし、それは読者による判定の助けにもなっただろう。

3．ヨナスに一貫するテーマ――世界を故郷とするために

ミュラーによるヨナスの「追跡」は、グノーシス研究、哲学的生命論、責任倫理学という三つの点を線で結ぶ試みである。ミュラーは、この三つの研究に通底する一つのテーマを想定し、これを浮き彫りにしていく。

ヨナスは1924年にマールブルク大学に入学し、プロテスタント神学者のルドルフ・カール・ブルトマンの指導のもと、グノーシス主義の研究に着手した。グノーシス主義とは、キリスト教の起源とほぼ同時期に地中海世界東方に発生し、2～3世紀に地中海世界全域および中東にまで拡大した宗教運動である。グノーシス主義の思想は、人間の霊魂を創った神と、世界を創った劣った神とを区別する世界観に基づく、霊魂と肉体（世界）の二元論、として概略されよう。この思想に従えば、人間の霊魂にとって世界は本来自分が属するべき場所ではなく、従って敵対的な場所であり、異郷である。「ユダヤ教の思想においても、キリスト教の思想においても、世界は人間にとって故郷である。それに対し、グノーシスにとっては、世界が馴染みのない異郷であることによって、同時に神と世界の間の二元論が定式化されている」（S.204）。ヨナスは、ここに世界に対する人間の責任の欠如を見て取る。「グノーシス主義者たちは、自らの意志に反して世界の内に投げ入れられていると感じていたのだから、自らの状態に対していかなる責任も引き受けることはない」（ibid.）。それがヨナスの洞察する「古代のニヒリズム」（ibid.）であり、本質的な無責任さの根源である。

ヨナスはグノーシス主義のニヒリズムを「自らの意志に反して世界の内に投げ入れられている」（ibid.）という実存的な気分として分析する。この分析を、ヨナスはハイデガーの方法論を用いることで遂行する。「グノーシスに対するヨナスの実存論的分析論は、ハイデガーの哲学によって規定されている。また、ヨナスはハイデガーの哲学を頽落という概念から適切に解釈している」（ibid.）。しかし、この方法論は、ヨナスに逆転の発想を喚起させる。すなわち「ヨナスはこの思索の方向性を反転させ、ハイデガーをグノーシスから解釈する」（ibid.）のである。この発想の反転、つまり、グノーシス主義をハイデガー的なものとして解釈することから、ハイデガーをグノーシス主義的なものとして解釈することへの反転が、ヨナスを現代社会の分析へと赴かせる。

ヨナスが着目したのは、現代の唯物論的な世界観であり、そこから帰結する生物学的な生命の

---

[5] Hans Jonas im Gespräch mit Mischa Dammaschke, Horst Gronke und Christoph Schulte, „Der ethischen Perspektive muß eine Dimension hinzugefügt werden“, in: *Ethik für die Zukunft. Im Diskurs mit Hans Jonas*, Böhler, Dietrich(Hg.), Verlag C.H.Beck München, 1994, SS.34-44.

理解である。

> それ〔唯物論的な世界観〕によって、世界全体が人間の目的のための手段として位置づけられ、精神は単なる肉体の機能になる。ヨナスは現代の自然科学のこうした還元主義的な態度を『生命の哲学』において決然と批判する。生物学においてのみ生命の機能が問われるという事態によって、生命の本質への問いは回答されないままになっている。それによって、主観性、情動、目的、目標、意志、自由のような事象はその生物学的な重要性を失うのである。（ibid.）

グノーシス主義において、人間にとって世界が異郷であったことと類比的に、現代においては、生命にとって世界は異郷である。人間の精神は、生物学的な機能へと還元されることで、肉体を構成する物質と同化し、その固有の重要性を失うからである。ヨナスはここに現代の新しいニヒリズムを洞察する。

このニヒリズムを克服するために、「ヨナスは自然に対する自身の人間学的解釈を提示する」（ibid.）。この解釈は、人間の精神や自由が自然の中にあらかじめ胚胎されている、という自然哲学である。「自然が人間を産み出したのであるから」、「主観性と自由の現象が原理的に自然の存在から切断されることは不可能」（ibid.）であり、そうである以上、人間にとって価値を帯びた「生存への意志」（ibid.）は自然の中に含まれなければならない。つまり、自然には価値が帰属しているのである。そうである以上、この解釈は「人間に向けられる要請は自然の存在から発せられうる、ということを示唆している」のであり、「それは最終的には、責任というテーマを待望するものである」（ibid.）。

以上のように、グノーシス研究、哲学的生命論、責任倫理学の連関を描くミュラーは、そこにある一貫したテーマが存在する、と指摘する。それは「世界を故郷として規定することを可能にすること、そして、『もっと世界に居やすくなること』に希望をもつことである」（S.203.）。ヨナスがグノーシス研究から洞察したことは、世界が異郷であるという事態が、ただちに人間から責任の意識を奪い去る、というニヒリズムであった。これに対して、科学技術文明における人類の責任を喚起するためには、まず世界が故郷として描かれなければならない。それが『生命の哲学』の主題なのであり、これによって初めて『責任という原理』は可能になるのである。

４．ヨナスへの批判――自然主義的誤謬

ただし、本書はヨナスを手放しで肯定しているわけではない。むしろ、著者ミュラーはヨナスの思想に対する自らの見解を明示し、辛辣な批判を突きつけている。

上述のようにミュラーは、『責任という原理』が『生命の哲学』において形成された自然哲学に依拠している、と解釈する。この自然哲学は、人間に責任を喚起する価値あるものは自然の中に形成されているのであり、それは進化のプロセスによって発現してくるものである、という形而上学的な自然観である。この思想は自然の存在から倫理学的な価値を導出するものである。ミ

ュラーはここにヨナスの誤謬を洞察する。すなわち、ヨナスは結局のところ、自然哲学による基礎付けを試みることで、「生命の維持という――カント的に理解すれば――仮言的な目標を基礎付けることができる権威――生命の存在論的な理念――を模索」（S.211.）していることになるのである。しかし、そうだとすれば、「ヨナスの議論はいわゆる自然主義的誤謬に基づくものである」（ibid.）ことが暴露される。

ヨナスは、生命を無条件の善として捉え、これを根拠に倫理学を構築している。しかし、生命という記述的な存在から、無条件の善という倫理学的な価値は導出できない。「結論は前提の内容より以上の内容を生み出すことができない、という議論の規則の前提に基づけば、記述（存在）からなんらかの規範（当為）が導出されている場合の誤謬の実態は明らかである」（SS.211-212.）。そうである以上、自然哲学を根拠に責任倫理学を展開すること自体に、原理的な誤謬が含まれているのである。むしろ、「当為は存在それ自身から基礎付けられうるのではなく、人間に対して存在の内容を自らの義務として媒介するところの、より規範的な要素からのみ基礎付けられ得るのである」（S.212.）。

自然主義的誤謬を突きつけるミュラーの批判は、ヨナスの責任倫理学を足元から崩壊させようとする。ミュラーは続ける。「従って、ヨナスに対しては次のことが批判的に固く主張されるべきである。すなわち、ヨナスによって要請される義務は責任の構造の形成を可能にするものではない」（ibid.）。つまりミュラーは、現代のニヒリズムを洞察し、警告を発した点においてヨナスを評価しながらも、それに対抗しうる新しい倫理学の理論を構築することには失敗した、と解釈しているのである。「何故なら、かつては神のもとに残されていたような、規範を与える資質を、自然のうちに編入されている価値を通じて捉えることによって、ヨナスは自然の道徳的な中立性も、人間の道徳的な自律も、放棄してしまったからである」（ibid.）。そうである以上、「こうした思想の形態は自然主義的誤謬ないし他律という裁断を免れず、それによって無力なものとして示されるのである」（S.213.）。

５．総評

しかし、筆者にはミュラーによる批判が斬新なものであるとは思えない。何故なら、この類の批判に対しては、ヨナス自身が既に『責任という原理』の中で反論を提示しており、そしてミュラーの批判はこの反論を覆すものではないからだ。

ヨナスは、自然主義的誤謬という発想を「存在と当為との間の断絶」[6] として捉え、ここには不問の前提が潜んでいると看破する。すなわち、この「断絶という考え方の根底には、単なる剥き出しの『ある』、ただ眼前にある、あった、あるだろうという存在の捉え方が潜んでいる」[7]、ということだ。存在から当為が導き出せないという推論には、存在には当為は帰属しない、すなわち存在とは当為と無関係なものであるという、特定の存在了解が先行している。しかし、この存在

---

6 Jonas, Hans, *Das Prinzip Verantwortung, Suhrkamp; Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*, Frankfurt am Main, 2003(1979)., S.234.

7 ibid., SS.234-235.

了解が妥当なものであるか否かは不問のままである。そうである以上、「存在から当為へ至る道がないというドグマは、その存在論的前提からして一つの形而上学的命題である」[8]。

その上、ヨナスを自然主義的誤謬として批判することは、著者ミュラー自身の立場の一貫性を危うくするものですらある。何故なら、自然主義的誤謬が前提とする存在了解こそが、「世界が馴染みのない異郷であること」（S.204.）を意味する世界観の帰結であるからだ。ヨナスの試みは、むしろ「世界を故郷として規定することを可能にすること」（S.203.）なのであり、言い換えるなら、自然主義的誤謬という発想の根底にある存在了解そのものを克服することなのである。ヨナスの思想に一貫する主題を、世界を故郷として捉えることとして解釈するミュラーの説に、筆者は賛同する。だからこそ、自然主義的誤謬を突き付けるミュラーの批判に、筆者は賛同できない。

結びにかえて、本書を総じて次のように評したい。本書は、ヨナスの各年代の思想を手堅くまとめた書物としては優秀であり、同様の系統にあるいくつかの書物[9]と比べて卓越している。ヨナスの多様な研究テーマに困惑する読者に対して、本書はヨナスを「追跡」するための糸口を提供することができる。他方で、ミュラーからヨナスへ加えられる批判は、ごく平凡なものであり、それどころか著者の立場の一貫性を危うくするものでもある、と評さざるをえない。本書の誠実な読者は、ミュラーに対して反論を試みるべきである。それによって、現代における倫理学の問題が、いかに一筋縄ではいかないものかが明らかになるだろう。その難解であると同時に緊急の大問題を立ち上がらせた点にこそ、ヨナスの思想の真の魅力がある。

（とやひろし　現代思想文化学・博士後期課程）

---

8 ibid., S.93

9 代表的なものとしては、Levy, David J, *Hans Jonas. The Integrity of Thinking*, University of Missouri Press, Columbia and London, 2002 や、Wiese, Christian, *The Life and Thought of Hans Jonas. Jewish Dimension*, Brandeis University Press, Hanover/London, 2010 がある。特に後者は、ユダヤ人としてのヨナスの生涯を追っていくという形で考証が展開されており、あくまで著作を追っていく本書とは異なる趣をもっている。